

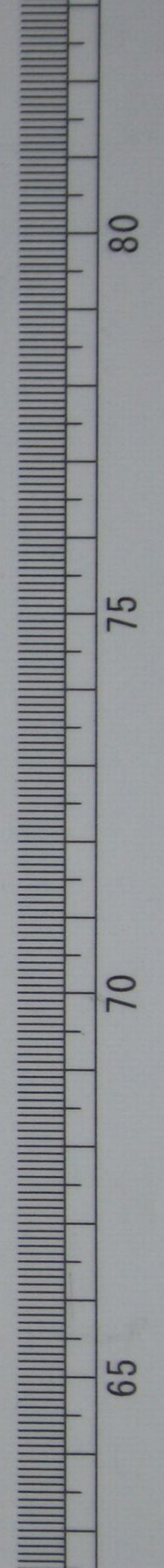


定價三錢五厘

新 聞 本 實

第一號

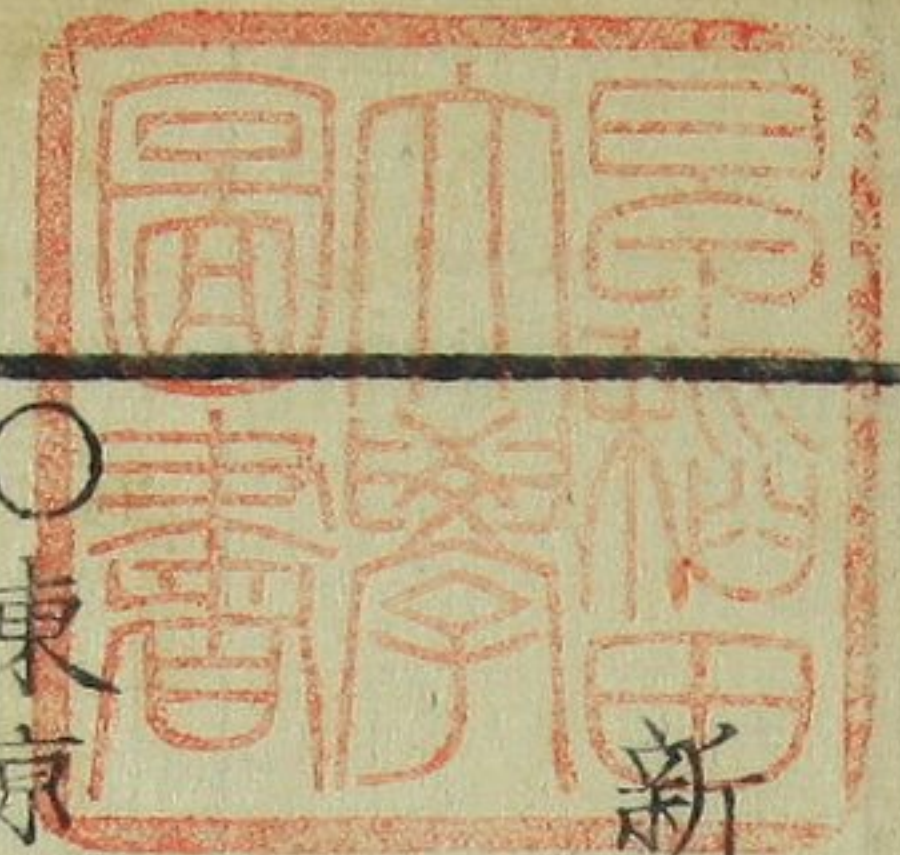
西垣文庫  
文庫 10  
7306  
1





緒言

ソノ天下ノ事情、ク相通シ未ダ見聞  
 コクノ新聞紙、如クハナシ、雖新  
 日ニ感ニシテ世ニ裨益アルハ  
 リト、故ニ僻遠ノ婦女子ニ至テハ未ダ  
 公布ノ人民普ク熟知セザル可  
 都鄙ノ新聞、悉ク其讀ニ成ル  
 併ニ各種新聞、悉ク其讀ニ成  
 名ノ附、而、神、史、林、撰、  
 女子ノ知識ヲ開カシメ、



新聞事實

明治八年六月一日



編輯 補正

松本平吉 吉田庸徳

○東京府下芝罘應寺町嶋田勝五郎方同居の人力  
 車曳時次郎の例の通り早朝より品川をス  
 シヨビ迄客を乗せ歸りの空の車を曳來う  
 其已前高輪南町薩下屋藤吉方小同居の時近  
 りの損料賃の蒲團と借りいかうか、其  
 小賃屋の藏へ預け置まると先方へかへさ  
 出逢ふ貸主ハ最ルきひしく催促をれと  
 好の明ねゆ一夜着あさ次第と云ひをうら  
 蒲團



このりし大腹  
立ち換料屋の

時次郎の来り

髪つらみ踏たり

蹴りさんく、又打櫛を

せし其上小突倒したる有り

さまの實、新内節の明烏小名も其終り

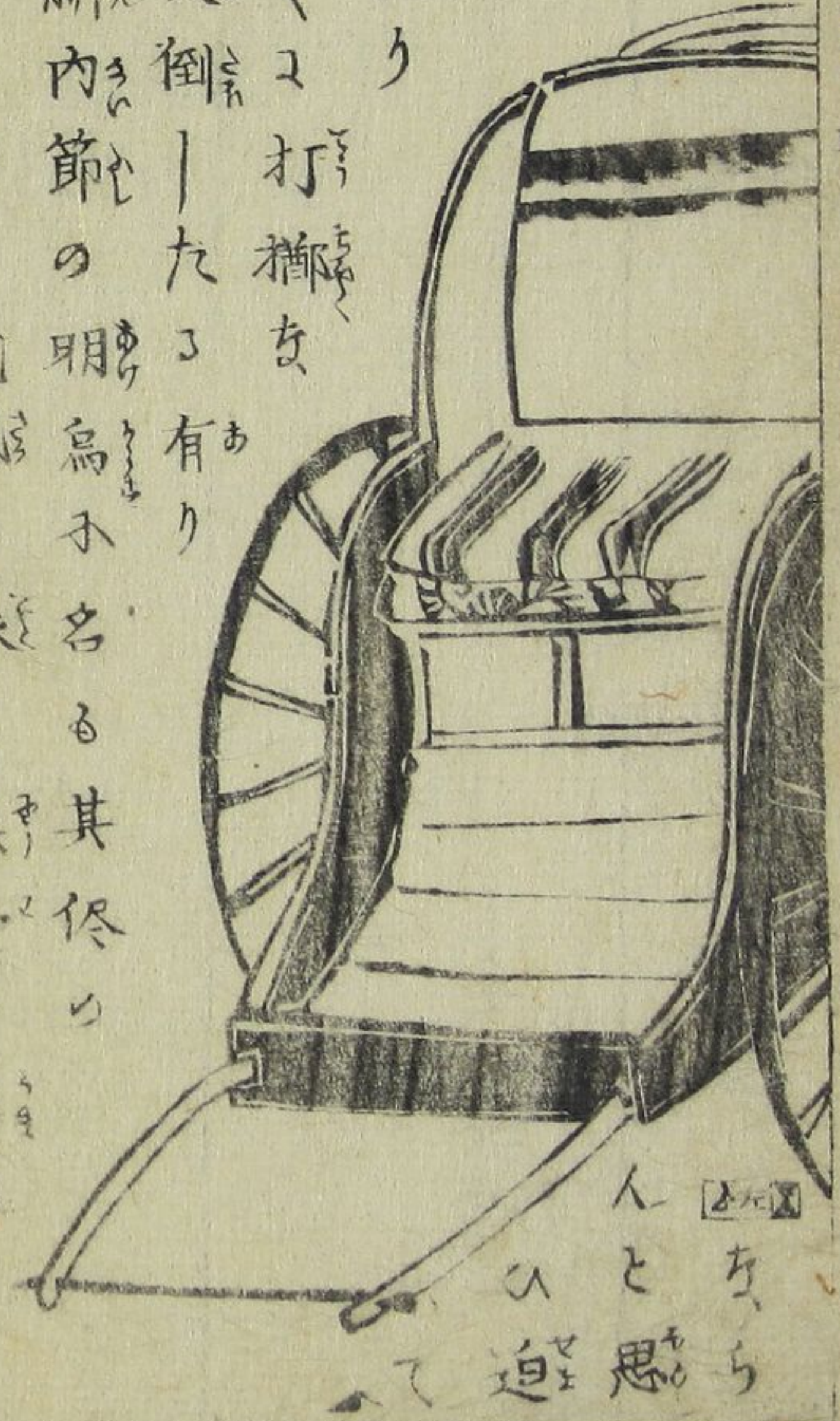
時次郎十九や二十の花盛り殊に柔和の生れ

女として何となく見悪くうらさる優男見

聞の人も不便さを思はぬ者も左う

りし、素より條理あり

了ま、一、事、一、止



人と思  
ひ逆

將監橋より  
一程近き

身と扱て死ふ

人と去とる

折もよく

人民

むる人も更ふ  
ちく只詫入く  
まくく砂打  
拂ひ車と曳我  
家へまど  
ま去歸り  
し、心地悪しと其日ふハ車  
片付家業と休之表面より出て  
とつおいつ思案小胸を痛む  
れと蒲團やう一も当をなく又  
打こらされし残念さといきて耻  
をむさらすより死ぬが遙くまし



保護の巡



復たがひ早くも見認みとれ文へ何  
 事こと々定めて仔細しじゆの有あり  
 ならんと直ただに警視けいし分署ぶんじよへ  
 引ひかれ一應いちやう糾問きうもんありと  
 れハ豈いかにウラヤ男おとこてあ  
 らで元もとハ甲府かうふの執番しやくばん組ぐみ父ちち  
 ハ水みづ上のうへ惣そう右衛門ゑもん二百石にひゃくしやくの  
 知行ちかうちかう取り旧幕きうまく旗はた下のしたのお嬢ぢやう  
 様さま昔むかししの栄さか花はな小こ由ゆ縁縁あり  
 名なもお栄さかと呼よべしものい  
 ろある事ことの因果いんぐわふての  
 くの姿すがたと成なりゆきの故ゆゑ



年としの末すえよして明治  
 と改あらため元  
 年としありし  
 年とし幕府ばくふ政せい  
 権けん奉還ほうげんの  
 時とき兵へい乱らんの所ところ  
 て兵へい乱らんの所ところ  
 小こ起おこりし其内そのうちよ  
 小こ取とり分け甲府かうふハ一ひと小こ都と會かい  
 遂つい小こ一ひと戦せん打敗うちまひし其動搖どうごう小こ



立退たちひき  
 小見こみを跡あと

新開事しんかいじ

親おや子こ兄あに弟てい五ご人にん  
 連つれ住すますを馴なれ  
 我わが家いへ居ゐるを  
 親おや子こ兄あに弟てい五ご人にん  
 連つれ住すますを馴なれ



ひとつの間ふやら  
 お栄の一人父  
 母兄弟をも見  
 失ひ此所彼處と尋ね  
 れど更ふ行衛の知  
 もさざれば若し  
 も故郷へ帰り  
 一やと再び國へ戻れ  
 ども固より帰る所  
 なども如何にせん  
 など如何にせんと思へど  
 も女一人の事を  
 思ふ分別もあ  
 く知るべの



三十三次  
 年を越  
 肌を觸  
 心よ誓ひ大

廣吉とて下駄屋  
 渡世の家は依  
 り使ひ奉公  
 といたせ志  
 が父母兄弟  
 の便りもなく  
 只逢たひの心  
 より遂ふ其家  
 を紛れ出  
 乞食まで身  
 をやつし  
 死な方  
 らを尋ねれど  
 叔手かりの  
 知れが  
 ればらぞ一生  
 懸命と靈驗  
 著しき八玉  
 子の  
 高  
 雄  
 山  
 へ  
 願  
 懸  
 も  
 ど  
 う  
 ぞ  
 父  
 母  
 兄  
 弟  
 小  
 今  
 ひ  
 と  
 た  
 び



願ひの  
 証女の



姿まがふて世渡よわたる事ことハむ

づうしと花はなの菴やうの十五

の年とし轉まの京きやうの登のぼり

つ、男おとこの姿まがふ身みを持もつ

へ前まへの黒くろ髪かみ剥む落おし

中間ちゆうかん奉ほう公こうや或あるひ

ハ又また藝ぎ者しやよつ

いて箱はこ廻まわし幾いく

年とし過すし事ことをささり

の金かね字じも出で来きささて

思おも案あんをうう一人ひとり力ちから車くるまを

くは是こゝが車くるま夫つまとをり

病やまひ小こ罹らり打う卧おし

子この遺ついでひ人ひと力ちから車くるま手て道みち具ぐ等らも

借かりし損そん料りやうの蒲ふ團だんまで

薬くすり換かへ命いのち拾ひろひ

貯たくわふ者ものとてなく人ひとの車くるまを

借かり受うて核こゝひて居ゐたらが

今いま朝あさのしき逢あひと思おもふ

兄弟けいだいの問とひ音ね信しんもあ

トきなき世よの神かみ仏ぶつも

見み放はなされしら難なん辛しん苦くも

見み放はなされしら難なん辛しん苦くも

見み放はなされしら難なん辛しん苦くも

見み放はなされしら難なん辛しん苦くも



時次郎ときじらう

どうせ達たれぬ因いん縁えん

おら寧なろろ死し

どが増まふら

んとい

身みと

成なり

ままししとと一いっふ

ままじじううのの物もの語ご

不ふ便べん思し

思おも案あんをうう一人ひとり力ちから車くるまを

くは是こゝが車くるま夫つまとをり

病やまひ小こ罹らり打う卧おし

子この遺ついでひ人ひと力ちから車くるま手て道みち具ぐ等らも

借かりし損そん料りやうの蒲ふ團だんまで

薬くすり換かへ命いのち拾ひろひ

貯たくわふ者ものとてなく人ひとの車くるまを

借かり受うて核こゝひて居ゐたらが

今いま朝あさのしき逢あひと思おもふ

兄弟けいだいの問とひ音ね信しんもあ

トきなき世よの神かみ仏ぶつも

見み放はなされしら難なん辛しん苦くも

見み放はなされしら難なん辛しん苦くも

見み放はなされしら難なん辛しん苦くも

見み放はなされしら難なん辛しん苦くも

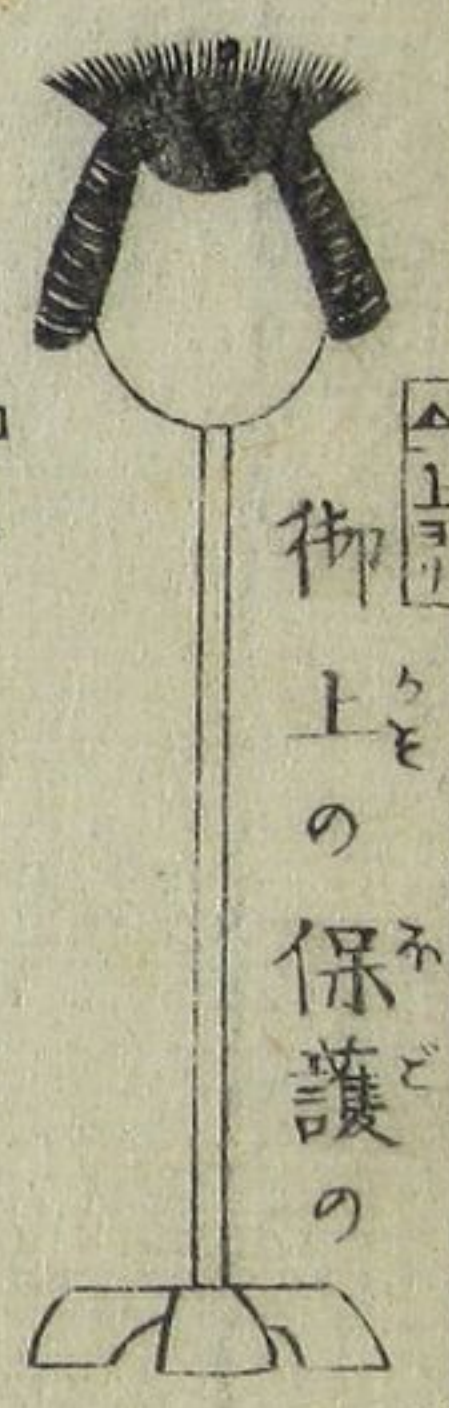
見み放はなされしら難なん辛しん苦くも



兩親ハ令西京さいきやうニ  
 て足袋屋たびやの渡世わたりよ  
 を開きて居ると  
 の事あらまし知  
 れしと申せしハ

△下△

〇朽木縣くつきけん下野國しも新  
 田郡しんでんぐん舞鶴村まづるむらの百姓  
 小境野十次郎おのさかぎのじよじらうと  
 云人の娘いづれにむすめ小あらで  
 息子いづれにこどんカ藏かざうと云者いづれにものハ頃ころ日ひ



御上の保護ごじやうのほごの

有難ありがたき生なまま  
 お栄えいの孝かう心しん  
 上帝かみ是こゝと  
 憐あはれそて父ちち母はは  
 の有あり  
 分わりし  
 五月ごがつ  
 十八日じふはちにち  
 のこと

東京見物とうきやうけんぶつとて南傳馬町なんでんばまちの娘籠むすめかご  
 屋へ暫しばらくらく足を止めしガ  
 いゝあつたマけウ物敷もの敷  
 奇あまり何なにの為ためらハ知らわ  
 迄持出しやつと積りて女の姿すがたあら  
 らぬちらと誹徊はいわいせしがなん不田舎ふでんが  
 の娘むすめトやとて其見苦みくるき有様ありさまを忽たちち身み  
 認とる巡査役じゆんさやくチャクて来れと弟あに一分署いっぶんしよ尻しりの  
 こるいふあらざれど違式ちがひしきとりの罪科つみかよて  
 フい罰金ばつぎんを取らましがまご此位こゝるハ愚おろクふこと  
 其本元ほんもとなる朽木くつき子こハ十倍増じゆうじゆうての正札せいさつ附極別品つけくべつひんの



千聞言



代物の宇都宮在二里山と云所の  
 魚屋の息子にておとよでいまい  
 豊吉ハ勘平さんのお年より  
 三ツ四ツハ越へたれど  
 未だ鯉の一人もの父  
 と家をバ別ホして二十  
 年も以前より髪のかたち  
 や衣裳ぶり心意氣迄  
 女として元ハ少し  
 の金銭と貯へ置き  
 事なればHなし  
 と貸て居ましたたが旅の行者



いひをくら又こ  
 他所有  
 まじき  
 大馬鹿  
 野郎  
 間拔  
 も云ひや  
 うが有り  
 ま  
 せん

小ついの惚れ  
 込下金白着  
 物も皆剃取られ  
 今いどう名やう  
 ううしやうと思へど外不家業  
 ろなり女ふ化し事あらば女髪結  
 と渡世として日々と暮して居り  
 升が豊吉さんと呼ときハ返辞所  
 向もせどお豊さんと云時ハさも嬉しそふ  
 見ゆれども元此者の福人可愛がれも志し  
 たう少し頭がおでまやへ陰でハ人ガ仇名を  
 でくと豊とのみ云よしするが如何ふとそけと



右



○千住在大磯村の柳百姓孫兵衛どのと云ふ

人ハ女房持よて娘一人生ど親ある身  
子てどう云ふ此節の酒事ふ遊びふけ  
女郎買あさる朝夕あきの入らぬ事でも  
つて有項天定り嫁の外入配嫁の里  
あろ相談し親且嫁をへし心自嫁の  
へも相談し親且嫁をへし心自嫁の  
まい女と連て辛抱と  
す子思ふ心からつ  
我子思ふ心からつ  
其子思ふ心からつ  
ののぶハフト聞ける年  
ハこづこの家と出さるる  
さまぐ此家と出さるる  
ふまつとるは大澳のと



見ると老人  
女房の断  
食しと  
病氣の何  
浪の心  
さる心  
兵衛と  
我子の今  
の今  
憫然

ありとて年をぬ  
女の供心配して村  
の鎮守の大神様へ三  
十一日の断食しての  
の放蕩の止ますやう  
どうぞ家に入られ  
と叶へて下されと子  
一ハ心願ひをうけし  
より米一石をうけし  
食せぬもへ  
三日四日と  
取を毎と  
つやあし  
く不立歩行よも  
ヒロくと蘇のつうれし



給させたさ  
の

新開



一杯ふうまぎを買てき、むれどおのぶの否と頭をふ  
 り給とうのどさうませんといへば孫兵工大腹立を  
 んまらどうでも勝手ふまるといひつ、  
 おのぶをつき倒せばハイ／＼そんなら申升  
 私病氣をありせんと父上さまと母  
 上さまの事は存ての願掛けな天神  
 様へ六くと夫也へ二十一日の間  
 何れも給せんと聞て祖父祖母  
 女房の涙るがら小見合せ孫兵工  
 も今更な面目なき次第て我子の心  
 我胸小釘打ふる、よりふにつらくせま  
 くる涙ど止めりね男あがら声をとて  
 娘といひき暫し言はるうしとぞ遂に心を改め  
 て娘の願ひし断食と已れの酒断りへて其於蕩と  
 止めしとは是兒娘の一心るり年も

さして  
 上へ申  
 既ふ御  
 たりと  
 る大と  
 感心  
 さして  
 忘て六  
 少女  
 少女  
 也



# 日沖社

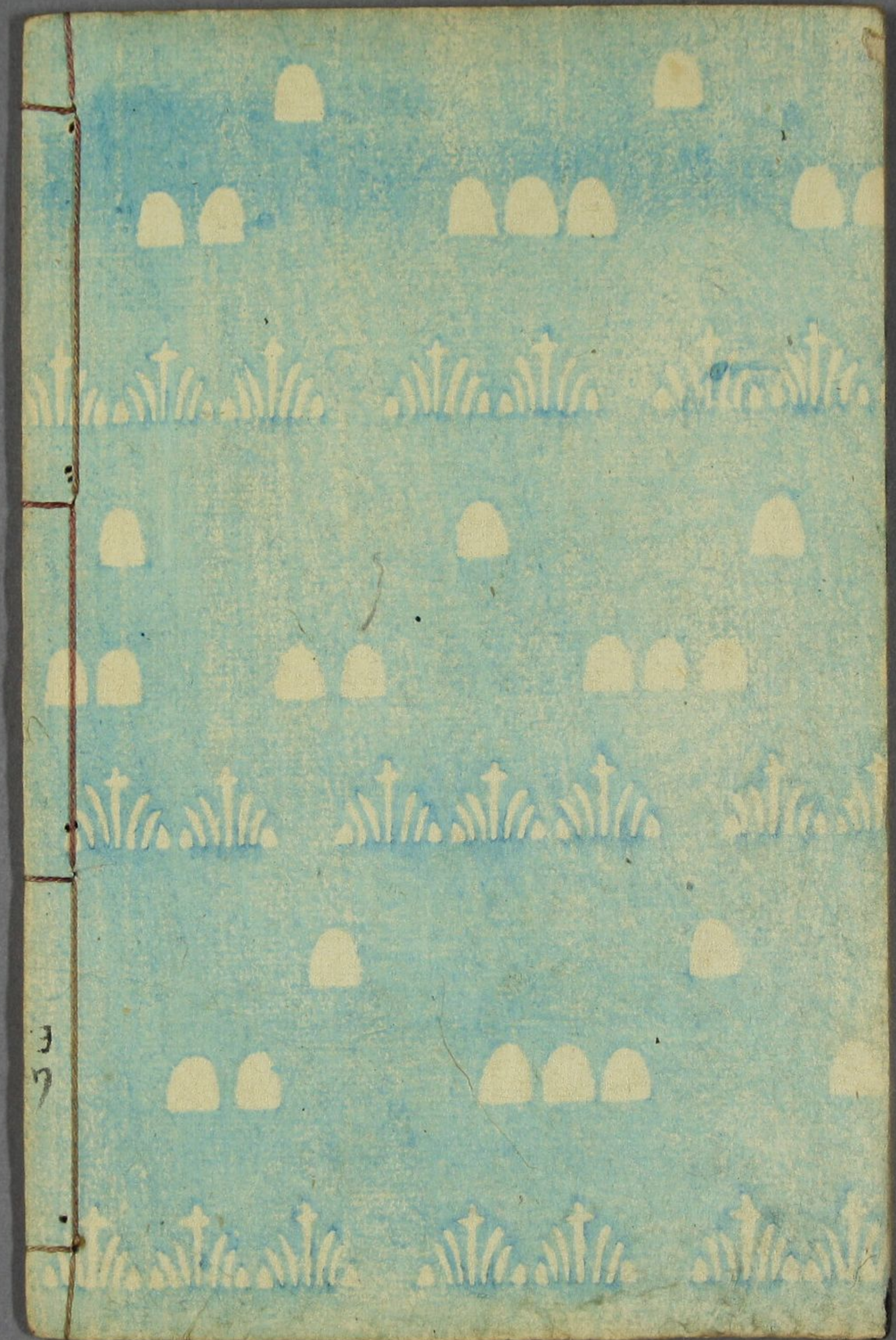
編輯兼 松木平吉  
 出版人 松木平吉



## 東京賣弘

- |         |        |
|---------|--------|
| 浅草寺地内角  | 大橋屋彌七  |
| ト谷仲町    | 伊勢屋利玄衛 |
| 本郷二丁目   | 古賀屋勝太郎 |
| 神田須田町   | 澤村屋清吉  |
| 日本橋通二丁目 | 丸屋織五郎  |
| 芝大神前町   | 萬屋吉兵衛  |
| 麹町六丁目   | 洋張屋清   |
| 北新場町    | 伊勢屋平兵衛 |
| 深川常盤町   | 越前屋嘉   |





3  
7